



田村市 都路町頭ノ巢 集落調査 報告書

福島大学経済経営学類
藤原遥ゼミナール

2021年度
大学生の力を活用した集落復興支援事業(実証実験)

1. 活動の目的

昨年度、藤原遙ゼミナールは、景観班とコミュニティ班に分かれて、田村市都路町頭ノ巣集落において、それぞれ実態調査を行った。その中で、明らかになったことは、身の丈に合わせた、持続可能な景観・コミュニティづくりをしていくことの必要性である。

我々を受け入れてくれている団体「ひと葉の風」の代表は、「集落を美しいかたちで畳む」という考え方を持っている。その考え方には、先祖が美しい景観を後世に残してくれたように、自分たちも土地を荒らさずに綺麗にして残したいという気持ちが込められている。東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能汚染の影響で、頭ノ巣では、少子高齢化・人口減少が加速し、農林業は衰退しつつある。農や食を通じた住民同士のつながりは薄れつつある。住居の周りを囲む田畑では、荒廃が目立つようになった。

こうした現状に対して、頭ノ巣では、「畳む」という考え方のもとで、現実を受け止め、いまある資源を活かして、人手をかけずに、自然に近いかたちで美しい景観をつくり、それを維持していくことが目指されている。コミュニティについても、住民の暮らしを豊かにするという発想で、つながりを再構築することを目指していくことが必要となる。

今年度は、昨年度の成果を踏まえて、「ひと葉の風」を中心とする住民に対して、聞き取り調査を行い、活動目標や方向性を導き出すことを目的とした。

<景観班>

昨年度の調査では、2つのことが見えてきた。第一に、住民の多くは共通して景観をより良くしたいという気持ちを持っていることである。第二に、頭ノ巣には「集落を美しいかたちで畳む」という地域づくりの視点があることである。

上記を踏まえ、今年度は、「集落を美しいかたちで畳む」という考え方についてヒアリングを通じて理解を深め、その考え方に即し、具体的な景観づくりの方法を考えていくこととした。

一回目の調査では、集落における自然の魅力や価値を顕在化させ、地域住民が考える美しい集落の姿を明らかにすることを目的にした。その調査方法として、日本自然保護協会による「人と自然のふれあい調査」(以下、ふれあい調査)を用いた¹。ふれあい調査とは、地域の人たちが大切に思う場所やかけがえのない自然、持続可能な自然利用の方法、自然とかかわりながら成り立っていた暮らし方などについて、地域住民と一緒に調査を行い、その結果をレポートや地図の形でとりまとめる方法である。生物多様性の保全や、持続可能な地域づくりを考える際に、採用される手法である。

二回目の調査では、ふれあい調査の結果を用いて、具体的にどのように景観をつくっていくのか、住民の意見を聞いた。

<コミュニティ班>

昨年度の調査では、農的な暮らしの中で生まれた「結」が頭ノ巣のコミュニティを考えるうえで重要であることがわかった。「結」は、共同作業のことを指し、頭ノ巣では、田植えや稲刈り、結婚式、葬式、神輿づくりなどを共同でおこなうものであった。人口減少が続く、人々のライフスタイルが変化しているために、従来と同じかたちで「結」を復活させることは難しい。その一方で、住民同士の集まりが減り、寂しさを感じている住民は

¹ 日本自然保護協会(2010)「人と自然のふれあい調査はんどぶっく」日本自然保護協会。

少なくない。

今年度は、頭ノ巣のコミュニティのあり方、および活動の方向性について住民とともに検討することを目的にした。

2. 活動スケジュール

(1) 1回目 2021年7月31日 頭ノ巣集会所にてヒアリング

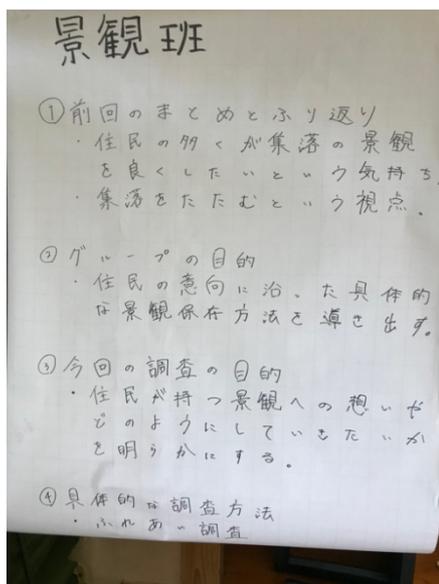


図1 景観班の資料



図2 ふれあい調査をしている様子

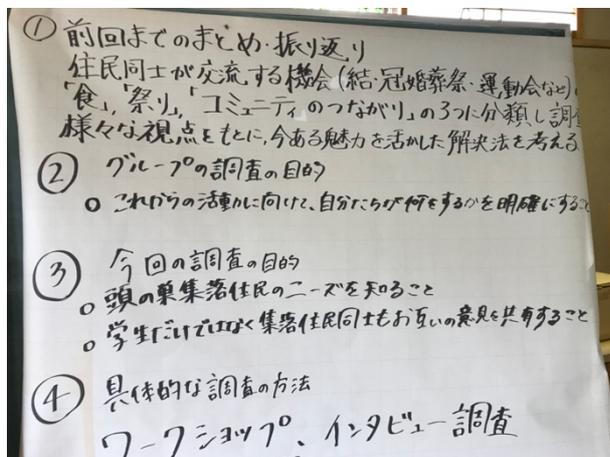


図3 コミュニティ班の資料



図4 ヒアリングをしている様子



図5 ふれあい調査の結果



図6 住民との意見交換をしている様子

(2) 2回目 2021年11月13日 旧オガ工場にてヒアリング



図7 住民との意見交換をしている様子



図8 ヒアリングをしている様子



図9 頭ノ巣の季節の行事



図10 ふれあいマップ

3. 具体的な活動内容

(1) 景観班の活動内容

景観班は、ふれあい調査と、今後の景観づくりに関する意見交換を行った。

日本自然保護協会の「人と自然のふれあい調査はんどぶっく」を参考にして、五感アンケートを行ったうえで、その内容をマップに書き起こす作業を行った。

五感アンケートとは、①目に浮かぶ風景、②耳に残る音、③鼻に思い出す匂い、④肌によみがえる感覚、⑤舌に懐かしい味、と五感で感じとった風景や場所、自然などを思い出してもらい、それをアンケートに記入してもらう方法である。アンケートで入手した情報をもとに場所を特定し、内容を地図に書き込み、ふれあいマップを作成する。

ふれあいマップを作成したことで、データとしては表しにくい地域固有の魅力を発見することができた。ふれあいマップは、住民同士で、地域の魅力を再確認し、また魅力を共有するための資料になる。

意見交換では、どのような景観づくりを目指すのか、具体的にどのような活動を行っていききたいか、参加者全員の意見を聞いてまとめた。

(2) コミュニティ班の活動内容

コミュニティ班の活動としては、主に行事と文化についてヒアリングをするとともに、集落の現状と今後について住民との意見交換を行った。

行事と文化に関する調査では、過去と現在における季節ごとの行事や文化について聞き取りを行い、それを模造紙にまとめた。模造紙にまとめたことで、過去と現在を比較して行事が少なくなっている現状を可視化することができた。住民が今後のコミュニティのあり方について考える材料をつくることができた。

意見交換では、どのようなコミュニティにしたいか、つながりを深めるためにどのような行事を復活あるいは新しく行いたいのか、個人が考えていることを語ってもらった。参加する住民全員に意見を出し合ってもらった。

4. 今後の展望

住民と意見交換をする中で、今後の展望として、以下の3つが挙げられた。

第一に、住民同士の交流の機会をつくることである。地元にある自然を活かした行事を開催し、住民同士が集う機会をつくるということである。たとえば、季節の旬の野菜を収穫して食べる収穫祭などの開催、都市住民にも声をかけて農業や伝統文化の体験会を開くことなどが提案された。交流の機会をつくる際に、耕作放棄地を活用する提案もあった。たとえば、耕作放棄地を景観のよい公園やキャンプ場として整備し、住民が集まる場所をつくるといったことである。

第二に、美しい景観をつくることである。これについては、今年度から2つの活動が具体化されている。1つ目は、集落の玄関口に花を植える活動である。集落の女性たちが中心となって取り組んでいる。この活動を通じて、女性同士が交流する機会が生まれている。2つ目は、耕作放棄地に、景観によく、少ない労力で栽培できる作物等をつくることである。現時点では、赤蕎麦や、ハーブ、グランドカバープランツなどが候補となっている。赤蕎麦は、食用ではなく、観賞用に使うことを目的としている。ハーブは、景観を良くすること以外に、アロマとしての用途をもたせることができると期待している。グランドカバープランツは、雑草が無秩序に生えてくることを抑える手間のかからない植物として注目されている。

第三に、集落の暮らしや文化を後世に残し、伝えることである。これは、学生からの提案である。具体的には、集落の暮らしについてまとめる「地元本」や、食文化についてまとめる「レシピ本」をつくる。本をつくることで、住民が集落の価値を再認識し、誇りを取り戻すことになると考える。地域で活動を行なっていく際のヒントにもなると考える。

「地元本」は、この地域での暮らしや歴史を後世、そして地域外の人たちに伝えるための本である。たとえ、畳むことになったとしても、住民は集落で暮らした誇りを保つことができ、また集落を訪れた人たちにも、美しい景観とともに、そこにあった集落での暮らしぶりを、本を通して理解することができる。

「レシピ本」は、伝統料理のレシピを載せるものである。頭ノ巣では、福島原発事故前に、柿餅や、キジの吸い物、団子粥などの伝統料理をつくり、それがローカルテレビで取り上げられたことがある。これらの伝統料理の作り方は、福島原発事故前には、集落の女性が集まる際に教わる機会があったものの、事故後には、集落の中で伝授される機会はなかった。伝統料理のレシピ本をつくることで、現世代、そして後世に食文化を伝えることができる。

5. フィールドワークの感想

私はコミュニティ班の一員として、頭ノ巣におけるゴールを住民と共に見つけ出すことに注力した。頭ノ巣でのフィールドワークを通して、「住民同士の繋がりを少しでも活発にしたい」と願う声が多く、ヒアリングの中で様々な課題・可能性を見つけることができた。

頭ノ巣での調査を通して、私は、「コミュニティの活性化」を行う際に「地元の魅力・課題が何かを把握しきれていること・幅広い世代が得意分野で活動していること」が重要であると考えた。

今年は新型コロナウイルスの影響により自由に活動ができず、悔しい思いがあったが、私達が調査でまとめたデータが頭ノ巣の課題解決に幾らか貢献できていると嬉しく思う。

岡崎瑠威

現地に赴き、集落の住民の声を直接聞くことにより、集落が抱える課題や住民が思う集落の魅力を生で感じ取ることが出来た。また集落の住民の共通の姿勢である、祖先から受け継いできたものを、時代と集落の状況の変化に考慮しながら良い形で次の世代へ繋いでいきたいという姿勢を目にしたことで、学生として集落の住民のために貢献したいと強く思うようになった。少子高齢化や地理的にも不利な条件を抱えながらも集落がよりよい方向に発展できるよう、今後の研究を進めていきたい。

加藤黎

昨年度に続き、今年度もコロナ禍で思うように現地調査を行うことができなかったが、頭ノ巣集落に訪問し、頭ノ巣集落の課題や魅力を再確認することができた。

課題を抱える集落は全国にある。頭ノ巣集落は、その中でも課題先進集落である。課題先進集落として、課題に対する解決の道筋を見出すことができればと思う。今後も調査を続け、どのような景観をつくっていくかについて住民と一緒に考えていきたい。

木幡裕紀

フィールドワークは、さまざまなことを我々に与えてくれる。文献で述べられているような過疎集落の問題は、全国的に存在している。しかし、地域の実情はそれぞれ異なるため、文献だけでは十分に把握することができない。現地を訪れることで初めて知ることがたくさんある。

フィールドワークによる調査は何度も行う必要があることを改めて認識した。最初訪れたときには気づかなかった地域の問題点や魅力が2回、3回と訪れることで発見することができることを、身をもって体感することができた。集落の住民の方のより良い暮らしを実現するためにも、足しげく現地に赴き研究を続けていきたい。

小林卓

頭ノ巣でのヒアリングを通して、そこに住む人々が地域の将来に何を思うかを踏まえることの重要性を感じた。人によって地域の現状への満足度や将来への希望も多種多様である。実際に現地へ赴き、多くの住民から意見を聞くことではじめて、今できることや今後すべきことを考えることができる。来年度も集落の方々に寄り添いながら、実際に行動に移せるものを考えていきたい。

佐藤駿

私は景観班の一員として頭ノ巣の地域づくりに携わった。地域の課題を発見して解決するまでの間に何度も意見交換を行った。やりたいことと、やれることのギャップを埋めること、そして地域の人と実際にコミュニケーションをとることの難しさを知ることができた。

コロナ禍ということもあり、思うように活動ができたというわけではないが、頭ノ巣のための力になることはできたと思う。

佐山大洋

昨年までは、活動内容が抽象的であった。今年の調査では、各班の活動内容を明確にすることができた。住民から挙げられた活動案の中でも地元本とレシピ本の作成については、今までの調査で収集した情報を利用することができるため、最初の活動として取り組めると良いと思う。私たち学生にできることは非常に限られているが、その中でできることを頭ノ巣集落の方々と一緒に今後も取り組んでいきたい。

橋本龍太郎

昨年度に比べ、今年度はたくさんの集落の人にヒアリングをすることによって新たな集落の課題、魅力を発見することができた。新しいコミュニティのあり方や若者の願いについても聞くことができた。提案された活動に、今後自分達も企画や参加していきたいと思った。

1年間を通して、新たなことを発見することはできたものの、自分達は頭ノ巣集落の課題や魅力をまとめるだけで終わってしまった。まとめたことが、頭ノ巣集落が抱える課題を少しでも解決できるようなものになることを願いたい。

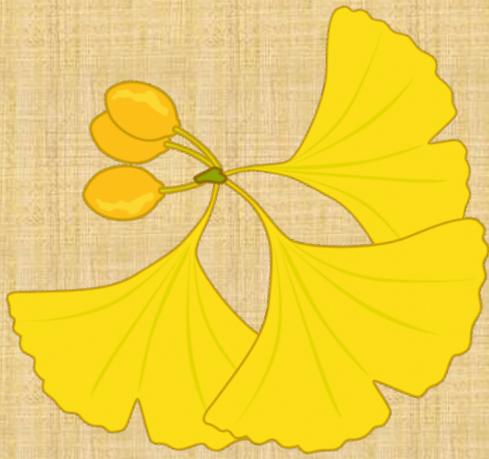
細澤勇生

頭ノ巣集落を訪れて、地域のコミュニティが強いことを知った。地域づくりをしていくうえで、コミュニティをどう再構築していくかが重要であると感じた。私たちの活動においては、魅力や課題を聞き出すだけで終わってしまった。できれば、今後も継続して頭ノ巣に関わり、問題点の解決策を考えていきたいと思っている。

八代さえ

今年度は、昨年度のゼミで行った活動を踏まえながら、頭ノ巣集落の方々の想いをより深く聞くことができた。それによって今後の展望も考えることができた。頭ノ巣における私たちの今後の活動については、コミュニティ班と景観班の双方が意見を持ち合って、議論できればと思っている。

渡部もも



田村市都路町頭ノ巢
集落調査報告書

発行日：2022年3月

編集：福島大学経済経営学類 藤原遥ゼミナール